

清代八股文における破題・承題について

On the “Opening the Topic” and “Receiving the Topic” Sections of
the Eight Legged Essay

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This essay first explains the meaning of the first two sections of the eight legged essay—the “opening the topic” and “receiving the topic” sections—and on this basis proceeds to explain the principles of composition associated with these two sections of the essay. The author believes that he has gone some way towards answering the hitherto rather unclear issue of the placement of these two sections within the eight legged essay. The “opening the topic” section is the most important and required meticulous care. It is thus no exaggeration to state that this section determined the fate of the entire essay. Following the “opening the topic” section was the “receiving the topic” section, usually consisting of four or six sentences. That which had not been fully treated in the “opening the topic” section continued to be developed in this section.

はじめに

周知のように清代の八股文は、

破題・承題・起講・入題・提股・出題・中股・後股・收股（乾隆丙戌〔一七六六年〕刊『文家規範』による）⁽¹⁾

というような形式になっている。問題文にあたる題目については、不十分ではあるが拙稿「清代八股文の題目について」（『経済理論』第310号・2002年刊）において解説を行なった。

そもそも、顧炎武（萬曆四十一年〔一六一三〕～康熙二十一年〔一六八三〕）が言うように、八股文の發端の二句を破題といい、その破題を承けて四・五句を作ったところを承題とする。

〔八股文の〕發端の二句、或いは三・四句之を破題と謂う。大抵對句もてするを多しと爲す。此れ宋人相い傳ふるの格なり。⁽²⁾下其の意を申べて、四・五句を作る。之を承題と謂う（『日知録』卷十六・「詩文格式」条）。

また、路德（嘉慶十四年〔一八〇九〕己巳恩科の二甲七十七名の進士）は、破題と承題とは一篇の骨子であり、採点官は、この數句を見て、八股文作成者の能力の大方を知ることができるとする。

破〔題〕・承〔題〕は乃ち一篇の骨なり。以後の許多の文字は俱に此の數句の中に包涵（含ませる）す。好手の破・承題を作るは萬萬に敢て放鬆（おろそかにする）ならず。寬（やさしい）題に遇う毎に、平平正正（きちんとしている）の中に于いて必ず能く自ずから手眼（才識）を出し、簡にして能く^つ該む。難題に遇う毎に、崎嶇險阻（山道の陰しくへだてられている）の中に于いて必ず能く遊行すること自如にして、題の爲めに縛られず。文を能くせざる者は、此れに反す。^{さいてん}衡文する者は、但だ此の數句を觀て、其の學問の淺深・筆力の強弱已に其の大概を得可し（道光丁未刊『時藝階』卷二・六十一葉～六十二葉・「而不掩焉者也」条）。

✓（１）ここでは、乾隆三十一年刊『文家規範』によったが、八股文の形式についてはいろいろな言い方や分類がなされている。たとえば、盧前は、

破題・承題・起講（小講）・領題（入題）・題比（提股）・出題・中比（中股）・後比（後股）・束比（多くは束比を用いず）・落下（收股）（『八股文小史』九葉～十葉・商務印書館・民國二十六年刊）。

というように分類する。また、王凱符（一九三四年～ ）は、

破題・承題・起講・入題・起二股・出題・中二股・過接・後二股・束二股・收結（『八股文概説』十七頁・中華書局・二〇〇二年刊）

としたりする。

（２）趙翼（雍正五年〔一七二七〕～嘉慶十九年〔一八一四〕）も『陔餘叢考』の「破題」条において、次のように述べて、破題の起源について考察を行っている。

今の八股〔文〕の起の二句を破題と曰う。然れども破題は八股に始まらざるなり（『陔餘叢考』卷二十二・四葉・「破題」条）。

本稿においては、この破題と承題とに形式について検討してみたい。ただし資料の制約から清代の八股文の形式についてのものになる。

(1) 破題

劉熙載（嘉慶十八年〔一八一三〕～光緒七年〔一八八一〕）は、破題を作る前は、題目によって自由に破題を作成することができるが、いったん破題を書いてしまうと、それからは自分の書いた破題に規制されて、八股文を作成して行かなければならない、と言う。

昔人 文を論じて謂う「未だ破題を作らざれば、文章 我に由る。既に破題を作れば、我 文章〔の作法〕に由る」と。余（劉熙載） 謂う「題〔目〕 書に出る者は、以て〔自由に〕斡旋（対応）す可し。題〔目〕の我に出る者は、惟だ抱定（しっかり従う）するのみ。破題は、我の出す所の題〔目〕なり」と（『藝概』巻六・經義概）。

自分の作った破題によって、自分の作る八股文がきまってしまう。つまり、破題は自分の作る八股文の内容を決定してしまう箇所であるとするのである。

啓功（一九一二年～ ）は破題について次のように述べる。

顧名思義（名称を見てすぐに意味がわかる）というように、「破」とは即ち解体するとか、分析するとかの意味である。暗号を解読することを「破訳」といい、なぞなぞを解くことを「破謎」という。文章のまくらで、先ず題目の意味を明らかにするので「破題」という。唐代の人が律賦を作り、宋代の人が經義を作ってから、明清の人が八股文を作るまで、始めに題目の数句を明らかにするのをすべて破題といわせた。ただ唐・宋の人の作法は、明・清の人の八股文のものほど杓子定規ではない。

何を杓子定規いうのか。八股文の破題は規定としてただ二句を用いるだけである。〔ただし〕三句の〔ような〕ものもあるが、多くは一つの長句の中に筆をとどめるところがあり、〔実際は二句なのだが〕三句に似ているものである。この〔破題の〕二句は主に題義を概括したり、題義を解釈した

りする。ただし、題意をあけすけに説くことはできない。あけすけに言うものは、重複に等しくて、「罵題」とよばれる。うまく作ってあるものは、常に透徹しており概括的である。たいへん長い複雑な題目は、題字に比べて何倍かの字数の二句を用いてそれを明晰に説明しなければならない（『説八股』「八股文形式的解剖」二 破題・十一頁・中華書局・一九九四年刊）。啓功は、続けて八股文において破題がどうして重要なのかを説明する。

科挙の試験場のなかで、答案の数は多く、採点官は少ない。題目は一律であり、〔答案の〕文体も一律である。採点の時間もまた短く、毎日一千ほどのものを見なければいけない。採点官の精神状態は、問わなくても分かるであろう。そういうわけなので、答案を見る人は、破題をみて、その答案全体の水準を予見するのである。たいへん簡単なことであるが、一つ的答案において頭の二句の筋が通っていなければ、下の文章がどうして突然良くなるであろうか。ましてやもし後半がやや良くても、冒頭が通じなければ、屋根のない家であり、合格を期しがたい。このため、採点官の注意力は自然と破題の部分に注がれる。作者は破題の部分にまたたいへん苦心し、力の限り破題を良く作ろうとする……（『説八股』「八股文形式的解剖」二 破題・十一頁・中華書局・一九九四年刊）。

考試において、最初の破題の二句だけで、合否が判断されてしまうからだという。さて、商衍鎰（一八七三年～？）は、破題について次のように概説する。

八股の破題は、明より清まで其の法 繁多なり。皆な二句を用いて單行し、明破・暗破・順破・逆破・正破・反破・分破・對破の別有り。長題の破〔題〕は簡括（要を得ていて概括的）を貴び、搭題の破〔題〕は渾融（融合する）を貴び、大題の破〔題〕は冠冕（堂々としている）を貴び、小題の破〔題〕は靈巧（機転が利く）を貴ぶ、其の要は題目の意義を將^もって破開し、而して題の旨を扼（おさえ）て、題の神に肖（のっとる）するに在り（『清代科舉考試述録』第七章八股文、試帖詩概紀及舉例積義 第一節 八股文之源流・生活讀書新知三聯書店・一九八三年第二次出版・二三二頁）。

破題は、二句で形成され、その形式によって明破・暗破・順破・逆破・正破・反破・分破・對破などに分類される。また、題目によって回答の仕方も異なるというのである。

唐彪は、『讀書作文譜』（康熙己卯〔一六九九年〕・毛奇齡序）で梁素治の言葉を引用して、破題作成の要点を次のように説明する。

〔破題〕 梁素治 曰く、凡そ破題を作るは最も題〔題〕の旨を扼（おさえ）て、題の神に肖（のっとる）るを要し、渾括清醒（概括的で明晰）なりて、精確（綿密）にして移らざるを期す（『讀書作文譜』卷之九・四葉）。

そして、破題を作成する上で行なってはならない「侵上」・「犯下」・「漏題」・「罵題」とはどのようなものであるかを説明する。

其の法 侵上す可からず、犯下す可からず、漏題する可からず、罵題する可からず。語 上文に渉るを之れ侵上と謂い、語 下文を犯すを之れ犯下と謂う。本題の意思を將^{いみ}つて未だ破全（完全に破く）するを経ず、或いは遺漏有り、是れ漏題と謂う。本題の字眼（文字）を將^もつて全然（すべて）寫出し、渾融（融合する）する能わず、是れ罵題と謂う（『讀書作文譜』卷之九・四葉）。

題目として出された箇所の上部、つまり出題範囲になっていない題目の上の部分まで入れて破題を作るのを「侵上」という。出題範囲となっていない題目の下の部分を入れて破題を作るのを「犯下」という。題目の意図を完全に把握しなかったり、残したりして破題を作るのを「漏題」という。題目の字眼（文字）をすべてそのまま書き出すだけで自分の書く破題と融合させることができないのを「罵題」とするということなのである。

『讀書作文譜』では続けて、破題の形式である明破・暗破・明破・暗破・順破・逆破・正破・反破などについて具体的に説明してゆく。

其（破題）の兩句の中、明破・暗破、

〔割注〕：明破は、本題の字に就きて明明に破^とき出す。「孝弟」の字は、即ち「孝弟」と破き、「道德」の字は、即ち「道德」と破くが如き、是れ

なり。暗破は、題目の字を將って暗暗に點換す。「孝弟」の類は、「倫」字を以て之に代え、「道德」の類は、「理」字を以て之に代えるが如き、是れなり。

順破・逆破、

〔割注〕：順破は、題面の字に照らして上より下る。「學而時習之」（『論語』學而）の先ず「學」字を破き、次に「時習」を破くが如き、是れなり。

逆破は、題面の字を將って下より上る。「其爲人也孝弟」（『論語』學而）の先ず「孝弟」を破き、次に「爲人」を破くが如き、是れなり。

正破・反破有り。

〔割注〕：正破は、題の正面より正語を以て之を破く。或いは反面よりするあり、或いは側面よりするあり。題語を措くに便ならざれば、亦た正意を以て之を破く。〔これらは〕俱に正破と名づく。反破とは、題意に反して之を破く。蓋し我を以て題を解するの法なり。

又た上句 章旨を領し、下句 本題を講ずる者有り。上句 本題を講じ、下句 章旨を承ける者有り。上句 本題を講じ、下句 或いは推開（しばらく置いておく）する、或いは吸下（続けて承ける）する、或いは直斷（直接に断定する）する、或いは虚足（遠まわしに補足する）する者有り。兩句もて分かちて題面を破く者有り。兩句 門扇の如く對峙する者有り。

〔割注〕：「不亦君子乎」（『論語』學而）より搭して「其爲人也孝弟」（『論語』學而）に至るを〔搭題形式の題目としたのを〕、破きて「君子爲學之終、孝弟爲人之始（君子とは學を爲すの終わりにして、孝弟とは人と爲るの始めなり）」と云うが如き、是れなり。

上句に即ち「也」字・「焉」字を用いる者有り。

〔割注〕：「問人於他邦」（『論語』鄉黨）題に、破きて「交之不可疎也、有因問以通其意者焉（交わりの疎くす可からざるや、問うに因りて以て其の意に通じる者有ればなり）」と云うが如きなり。

皆な常格なり。三句を用いる者に至れば則ち變格なり。 長題の破

〔題〕は簡括（要を得ていて概括的）を貴び、搭題の破〔題〕は渾融（融合する）を貴ぶ。大題の破〔題〕は冠冕（堂々としている・立派である）を貴び、小題の破〔題〕は靈巧（機転が利く）を貴ぶ（『讀書作文譜』卷之九・四葉）。

また、趙國麟（康熙四十八年〔一七〇九〕己丑科三甲八十名の進士）の『制義綱目』では、いま述べた破題の分類にいくつかの形式のものを付け加えて、順破・對破・渾破・串破・先破・後破・逆破を次のように説明する。

順破 題の體に順う。上下の層折（重な^ゆって転じる）に之き、次第に之を破く^と……。

對破 題目を將^もって對語（對句）を作り之を破く^{つく}。兩句の相い對する者有り、四句の相い對する者有り、先ず一句を提（引き出す）する者有り、後に一句を收める者有り……。

渾破 題中の層次（筋道・文章の順序・文脈）を分かたず、惟だ大意の渾含包括を將^もって之を破くなり。

串破 題中の層次を將^もって一句を作り、串ね説きて之を破くなり……。

分破 題中の層次を將^もって分開（分ける・別々にする）し、之を破くなり……。

先破 先ず題面（題目の意図が込められた部分）を破き、後に題意（題目全体の意図）を破くなり。或いは先ず題面を破き、後に題原（意味合い）を破くなり。

後破 先ず題意を破き、後に題面を破くなり。或いは先ず題原を破き、後に題面を破くなり……。

逆破 先ず下載を破き、後に上載を破くなり。先ず下に在るの實字を破き、後に上に在るの虚字を破くも亦た逆破と爲す（『制義綱目』不分卷・三十五葉）。

そして、趙國麟は、順破が最も標準的なものであるとする。

破〔題〕は、順〔破〕を以て正と爲す。順〔破〕は、則ち局意（各部分の意味）自から定まる。對〔破〕・渾〔破〕・串〔破〕・分〔破〕・先〔破〕・後

〔破〕の六法あるも、皆な當に順〔破〕もて之を用うべし。逆破は變體なり。隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）の後、多く之有り、終に訓を爲す可からず。惟だ單句題の虚字の上に在る者は、當に逆〔破〕を用いるべし。蓋し逆〔破〕ならざれば、則ち截清（はつきりと切り取る）する能わざるの故なり（『制義綱目』不分卷・三十五葉）。以下、それぞれの形式を簡単に述べてみると、次のようになる。

明破 題目の文字に基づいてそのまま破題を作成する。題目に「孝弟」の字があれば、「孝弟」の字を用いて破題を作成するようなもの。

暗破 題目に「孝弟」の字があれば「倫」の字に代えて破題を作成するようなもの。

順破 題目を上から下に破いて破題を作成するもの。

逆破 題目を下から上に破いて破題を作成するもの。

正破 題目の意味を正面から破いて破題を作成するもの。

反破 題目の意味を逆手にとって破題を作成するもの。

對破 対句のような破題を作成するもの。

渾破 題目の全体の大意を破いて破題を作成するもの。

串破 題目の文脈をひとつに連ねて破いて破題を作成するもの。

分破 題目の文脈を分けて破いて破題を作成するもの。

先破 先ず題面を破き、続いて題意を破き破題を作成するもの。もしくは、先ず題面を破き、後に題原（意味合い）を破くもの。

後破 先ず題意を破き、続いて題面を破き破題を作成するもの。もしくは、先ず題原を破き、後に題面を破くもの。

では、明破・暗破・順破・逆破・正破・反破・渾破・前破・後破の具体的な形式とはどのようなものであるのかを長沙の曹原亮の『十四層啓蒙捷訣』（道光九年新鐫）にあげられた例文にしたがって見てみよう。ただし對破・串破・分破は適切なものが見当たらず、例示できなかった。

①明破（題目を下から破くので逆破でもある）

題目：其爲人孝弟（『論語』學而）

大賢以孝弟望天下，而深念其爲焉（『十四層啓蒙捷訣』上・一葉）

（大賢は孝弟を以て天下を望み，而して深く其の爲すを念う）

②暗破（「思齊」を暗破し，「見賢」を明破している）

題目：見賢思齊焉（『論語』里仁）

見非虚見，賢不獨賢矣（『十四層啓蒙捷訣』上・二葉）

（見るは虚見するに非ず，賢は獨り賢ならざればなり）

③順破

題目：愛之能勿勞乎（『論語』憲問）

愛不徒愛，勞益愛矣（『十四層啓蒙捷訣』上・三葉）

（愛するは徒に愛するにあらず，勞（ねぎろ）うて益々愛す）

題目：忠焉能誨乎（『論語』憲問）

臣而忠焉，勿誨不能乎（『十四層啓蒙捷訣』上・四葉）

（臣にして忠なれば，能わざるを誨うることを勿らんや）

④逆破

題目：愛之能勿勞乎（『論語』憲問）

勿勞不能，心乎愛矣（『十四層啓蒙捷訣』上・三葉）

（勞うこと勿れ 心なるや愛なり）

⑤正破

題目：見不賢而内自省也（『論語』里仁）

不賢在人，見之當自省也（『十四層啓蒙捷訣』上・七葉）

（不賢の人に在れば，之を見て當に自ら省みるべきなり）

⑥反破

題目：見不賢而内自省也（『論語』里仁）

見不自省，將不堪爲人見矣（『十四層啓蒙捷訣』上・七葉）

（見て自ら省みざれば，將に人と爲り見るに堪えざらんとす）

⑦渾破

題目：愛之能勿勞乎（『論語』憲問）

原爲人父之心，有不克自己者焉（『十四層啓蒙捷訣』上・四葉）

（人の父爲るの心を原^{たず}ぬるに，自己に克たざる者有り）

題目：學者亦必以規矩（『孟子』告子上）

學不廢法，匠其小者也（『十四層啓蒙捷訣』上・十二葉）

（學は法を廢せず，匠は其の小なる者なり）

⑧先破

題目：見不賢而内自省也（『論語』里仁）

因見而省，自治嚴矣（『十四層啓蒙捷訣』上・八葉）

（見るに因りて省みるは，自ら治むること嚴なればなり）

⑨後破

題目：居無求安（『論語』學而）

志更有切於居者，宜其安之無求也（『十四層啓蒙捷訣』上・六葉）

（志 居に切なる者有るを更めれば，其の安きの求めること無しに宜し）

さて、『匯學讀本』では、『讀書作文譜』を踏まえて次のように述べる。そして、破題における虚字に使いかたに言及する。

破題とは，題中の意を破説す。題 整（ととのう）なれば破く^とに以て之を分かち，題 晦^{くら}ければ破く^とに以て之を明らかにすと謂う。……凡そ破題を^{つく}做るに，止だ兩句を用う。務めて深括清醒（概括的で明晰）なりて，確切（綿密）にして移さずを要す。其の法 「連上」す可からず，「犯下」す可からず，「漏題」す可からず，「罵題」す可からず。語 上文に粘（くつつく）けば，是れ「連上」と謂う。語 下文を露わにすれば，是れ「犯下」と謂う。題の緊要（重要な）の字，未だ破全（完全に破く）を経ざれば，是れ「漏題」と謂う。題目の字少なき者，全然（すべて）寫出するを，是れ「罵題」と謂う。兩句の中に明破・暗破・順破・逆破・分破・總破・對破・正破等の法

有り。間々反破を用いる者有るも、成才（もともとすぐれているもの）^{まさ}方に之を爲す可し。初學 宜しく輕しく效うべからず。又た上句 章旨を顧み、下句 本題を破く有り。上句 本題を破き、下句 章旨に跟（したが）う有り。上句 全章を冒い、^{おお}下句 本題を破く者有り。上句 本題を破き、下句 或いは吸下（続けて承ける）す、或いは直斷（直接に断定する）す、或いは虛托（遠まわしに補足する）する者有り。兩句 珠の連なるが如く貫き下る者有り。兩句 環の連なるが如く廻轉し相い抱く者有り。總じて看るに題目の如何なる〔かによる〕のみ。上句は歇語（句点をつける）を用いざるも、「焉」①字・「也」②字・「者」③字・「之」④字は、間々或いは之を用う。下句 歇語（句点をつける）あれば、則ち「也」字・「焉」字・「矣」⑤字・「者也」⑥・「者焉」⑦・「者矣」⑧・「而已」等の字を用う。「乎」⑨・「哉」⑩・「耶」⑪・「歟」⑫等の字の若きは、例として當に用いるべからず（光緒四年『匯學讀本』三十四葉）。

- ① 亦た平落（落ちてく）の詞なり。但し「也」字に較べて、韻 略ぼ輕清（もの柔らかく快い）にして、意 略ぼ虛活（はつきりさせない）（光緒四年『匯學讀本』三十一葉）。
- ② 平落の詞なり。凡そ文勢 平平（ふつう）に落下にして、高きも太はだしくは揚がらず、低きも太はだしくは卑からざる者は、則ち之を用う。中間 襯（際立たせる）を作す者 『論語』の「其爲人也孝弟」（『論語』學而）・「可也簡」（『論語』雍也）・「赤也惑」（『論語』先進）の類の如きなり（光緒四年『匯學讀本』三十一葉）。
- ③ 句尾の襯墊（当て布）の詞なり。多く人を指し・物を指し・理を指して言う。亦た偶々虚にして指す所無き者有り（光緒四年『匯學讀本』三十一葉）。
- ④ 襯托（際立たせる）の虚字なり。本句の義理は此の襯托に非ざれば、透出する能わず。故に用いる所極めて多し。外に實字の用と作す者有り。〔その例としては〕「大學之道」（『大學』經）・「天命之謂性」（『中

庸』第一章)は「的」字に作りて解す。「[人]之其所親愛」(『大學』傳八章)は「於」字に作りて解す。「之三子告」(『論語』憲問)・「滕文公[爲世子]將之楚」(『孟子』滕文公上)は「往」字に作りて解す。其の義一ならず。惟れ善く用いる者のみ之を辨づ(光緒四年『匯學讀本』二十八葉)。

- ⑤ 截然として緊煞(はっきりと終わらせる)の詞なり。凡そ文義 説き^お煞えんと欲すれば、則ち之を用う。一定にして移らざるの意有り。又た抑して復た起こるの詞なり。凡そ下文を申べるを將って故に一按なる者^なを作し、亦た之を用う(光緒四年『匯學讀本』三十一葉)。
- ⑥ 順落(下に向かつて)にして煞住(終わらせる)の詞なり(光緒四年『匯學讀本』三十一葉)。
- ⑦ 順落にして輕住(軽く終わらせる)の詞なり(光緒四年『匯學讀本』三十一葉)。
- ⑧ 順落にして緊煞(はっきりと終わらせる)の詞なり(光緒四年『匯學讀本』三十一葉)。
- ⑨ 疑いて未だ定まらずの詞なり。商量の意有り。詠嘆の意有り。辨駁の意有り。俱に上文に随いて之を用う(光緒四年『匯學讀本』三十二葉)。
- ⑩ 略ぼ「乎」字と近似す。然れども「乎」字は多く疑う。「哉」字は却って驚き怪しむの意・嗟嘆の意・贊揚の意・自得の意有り。凡そ之の反せんと欲する・之を駁せんと欲すれば、則ち此れを用う(光緒四年『匯學讀本』三十二葉)。
- ⑪ 亦た疑うの詞なり。「乎」・「哉」字と相い類す。但し微かに帶びる婉轉(婉曲で含蓄ある)たる詰問の意は「乎」・「哉」字に較べて趣味(味わい) 悠長なり(光緒四年『匯學讀本』三十二葉)。
- ⑫ 「乎」字と同義なり。然れども「乎」字は軽く、「歟」字は隱なり。「乎」字は疑いて未だ定まらず。「歟」字は則ち疑いて而れども疑わざる者有り。在るに「君子人^{ママ}歟」(『論語』泰伯)・「其爲仁之本^{ママ}歟」・

(『論語』學而)・「其舜也歟」(『論語』衛靈公) 如き、以て例とし観る可し(光緒四年『匯學讀本』三十二葉)。

また、張泰開(乾隆七年壬戌科二十二名の進士)の『論文約旨』(乾隆三十一年刊)によると、承題とのつながりにふれ、題目を破題で十分に破けなかった時は、承題の頭に「蓋」字を用いて更に解釈したり、「夫」字を用いて順接したりする。また、破題だけで、題目の意味を破くことができたのならば、「甚矣」を承題の頭に用いて承題を作成するという。

論破承：破題は題旨を見ずを要し、但だ題の字面(表面上のことば)有るのみを得ず。承題は須く題字を將って拆開(分析する)し用いるべし、便ち意思を見せばなり。題字の前句に見る者、後句 複すること勿れ。破[題]・承[題]は務めて簡淨(簡潔)喫緊(切実である)を以て要と爲す。最も「其の意深し(其意深矣)」・「以有るかな(有以夫)」等の混話(陳腐な話)を忌む。又た破[題]と承[題]とは反なれば正・順なれば逆もて須く互換すべし。破[題]承[題]の末句 字を換えて意を同じくする可からず。破[題]の意 未だ顯われざれば、「蓋」①字を用いて之を釋し、「夫」②字を用いて順接す。[破題の意]已に盡くせば「甚矣」を用いて斷起す。皆な漫然とするに非ず(『論文約旨』四葉)。

① 亦た係れ起手(開始)の語詞を助くる虚字なり。其れ之を用いて推原する者は、乃ち是れ語詞中の義に接す……(光緒四年『匯學讀本』二十二葉)。

② 起手の助辭、乃ち虚字なり。若し第二字 實なる者なれば、始めて指す所有りと爲す。〔それは〕「夫道」(『孟子』滕文公上)・「夫仁」(『論語』雍也)・『孟子』公孫丑上)・「夫天」(『孟子』公孫丑下)・「夫貉」(『孟子』告子下)の類の如し。若し次の字 虚なる者なれば、乃ち確として係れ虚字にして、指す所有りと云う可からず(光緒四年『匯學讀本』二十二葉)。

『文家模範』においても、これまでみてきたのと同じような解説を行なっている。

〔破題〕破とは剖（解明）するなり。題義を剖晰（ぶんせき）すること、物を破^とき其の中の有る所を見すが如きなり。上句 題面を破き、下句 題意を破く者有り。上句 本題を講じ、下句 或いは推開（しばらく置いておく）し、或いは下を起こす、或いは實斷（直接に断定する）す、或いは虚托（遠まわしに補足する）する者有り。兩句もて本題を分破する者有り。兩句もて門扇の対峙するが如くする者有り。兩句もて珠を連ね貫き下るが如くする者有り。兩句もて廻環の相い抱くが如くする者有り。故に正破有り、反破有り、順破有り、逆破有り、明破有り、暗破有り。大約 意を破き・句を破き・字を破くの三項に外ならず。〔そして〕意を破くを上と爲し、句を破くは之に次し、字を破くは又た之に次す。大題の破〔題〕は冠冕（堂々としている・立派である）を貴び、小題の破〔題〕は靈巧（機転が利く）を貴び、長題の破〔題〕は簡括（要を得ていて概括的）を貴び、搭題の破〔題〕は渾融（融合する）を貴ぶ（『文家模範』二十八葉～二十九葉）。

また、路德（嘉慶十四年〔一八〇九〕己巳恩科の二甲七十七名の進士）は、明破と渾破とをくらべて、渾破のほうがよいとする。

大凡そ破題を作る者は、明破・渾破 均しく可ならざる無し。但し明破なる者は、之を老實（規則どおりにする）に失う。〔だから〕渾破の易く超脱（規則・形式にとらわれない）と爲すに如かざるなり。出題（題目）中の一字を説き出ださず、之を全渾と謂う。一半を説き出だし、一半を留め得る、之を半明半渾と謂う。若し題字を將^もって盡數（すべて）説き出だせば、則ち全然（まったく）渾ならず。學者 即ち全渾を爲す能わざれば、亦た當に勉めて半渾を爲すべし。題字は、何をか宜しく明にし、何をか宜しく渾とするや。此の處 原より一定する無し。大約 實字もて宜しく渾ずべし。其の空なる者・虚なる者は、反って明明として説き出だすに妨げあらず。空・虚の字は仍お輕清（もの柔らかく快い）と爲るを害せず。實字を説き出だすは、勢い將に流れて重濁（はっきりしない）と爲らんとす。今の學

者 毎に破題を作るに、率ね喜びて題中の實字を將って一口に説き出だすは、只だ題面に泥定（拘泥する・こだわる）するに縁り、消息（兆候）を採取し意致（おもむき）を生出するを知らざるのみ（道光丁未〔一八四七年〕刊『時藝階』卷三・五十一葉・「語小」条）。

続いて、破題における代字について考えてみる。

（2）破題における代字

題目において孔子などの言葉が用いられていた時、破題においては、別の字に代えてその意味を表さなければならなかった。商衍鎔は、次のように述べる。

破題は聖賢・諸人に於いて須く代字を用うべく、其の名を直指す可からず。堯・舜は則ち帝と稱し、孔子は則ち聖人と稱すの類の如し。承題は則ち之を直言す、堯・舜なれば、直ちに堯・舜と稱し、孔子は直ちに孔子と稱するが如し。其の餘の諸人は此れに仿い、復た避忌無きなり（『清代科舉考試述録』第七章八股文、試帖詩概紀及舉例釈義 第一節 八股文之源流・生活讀書新知三聯書店・一九八三年 第二次出版・二三二頁）。

このように、破題においては、厳格に代字の用法が決められていたのである。『匯學讀本』によると、それは次のように破くものであった。

孔子は聖人と破く。或いは單に破くに聖の字もて聖心・聖教・聖言・聖容の類の如くす、是れなり。羣聖と比べ論ずる處なれば、則ち至聖と破くは羣聖に別つ所以なり。

顔子・曾子・子思・孟子・閔子騫・有若は俱に大賢と破く。

冉伯牛・仲弓・南容・子夏・子貢・樊遲・子游・子路・子張・冉有・公冶長・子賤・宰予・漆雕開・公西華・申枨・巫馬期・〔琴〕牢・曾皙・子羔・司馬牛は俱に賢者と破く。惟だ申枨・子禽は或いは門人と破き、伯魚は聖嗣と破き、又た〔琴〕牢と曾皙とは或いは狂士と破く。兩賢並び稱されれば、則ち二賢と破き、數人なれば、則ち羣賢と破く。

從者・小子・二三子は俱に門人と破く。

萬章・樂正子・公孫丑・陳臻・徐辟・充虞・高子・公都子・彭更・咸丘蒙・桃應・屋廬子・陳代は俱に門人と破く。

堯は唐帝と破く。 舜は虞帝と破く。 堯・舜並びに稱されれば、則ち二帝と破く。 神農は古帝と破く。 禹は夏王と破く。 湯は商王と破く。

武丁は殷王と破く。 文〔王〕・武〔王〕は周王と破く。 三代並びに稱されれば、則ち三王と破く。 文〔王〕・武〔王〕並びに稱されれば、則ち二聖と破く。 益・契・皐陶は虞臣と破く。 后稷は古聖と破く。 禹・稷並びに稱されれば二聖と破く。 伊尹・周公は元聖と破く。 伯夷・叔齊・柳下惠は古聖と破く。 泰伯・虞仲・朱張・夷逸・微子・比干・箕子は古人と破す。

齊桓公・晉文公・秦穆公は霸王と破く。 魯昭公・定公・哀公・繆公・平公は魯君と破く。 齊景公・簡公は齊君と破く。 梁惠王・襄王は梁王と破く。 齊宣王は齊王と破く。 滕定公・文公は滕君と破き、世子爲りし時は儲君と破く。

管仲・晏平仲・陳文子は俱に齊大夫と破く。 季文子・季桓子・季康子・孟獻子・孟莊子・孟武伯・孟敬子・藏文仲・藏武仲・孟公綽・子服景伯・〔叔孫〕武叔は俱に魯の大夫と破く。 甯武士・孔文子・蘧伯玉・史魚は俱に衛大夫と破く。 令尹子文は楚卿と破く。 子産・裨諶・世叔・子羽は鄭大夫と破く。

王孫賈・陽虎は權臣と破く。 司敗・葉公・太宰・儀封人は俱に時官と破く。 師冕・師摯・〔亞飯〕干・〔三飯〕繚・〔四飯〕缺等は俱に樂官と破く。

臧倉・彌子瑕・王驪は倖臣と破く。 陳賈は佞臣と破く。 胡齋・莊暴は齊臣と破く。 畢戰は滕臣と破く。 孫叔敖・百里奚は霸佐と破く。

傳説は殷相と破く。

林放・微生高・微生畝・尹士・周霄・景春は俱に時人と破く。 或人は亦た時人と破く。 長沮・桀溺・晨門・荷簋・楚狂〔接輿〕・丈人は俱に隱士と破く。

老彭は昔賢と破く。 長息・公明高は昔人と破く。 龍子は古人と破く。
楊朱・墨翟・許行・夷之は俱に異端と破く。 陳良は楚儒と破く。 孟賁・
烏獲・北宮黝・孟施舍は俱に勇士と破く。 王良・奕秋は藝士と破く。
淳于髡は辯士と破く。 張儀は説士と破く。 凡そ其の餘の盡く載せざる者
は、皆な類推すべし（光緒四年『匯學讀本』一葉～二葉）。

以上は、破題の代字の中で最も重要な人名についての用法についてである。
他の文字に関しては、やはり細かい規定が存在する。

ただ、路徳は、必ずしもこうした規定にとらわれるべきではないという。

『孟子』（盡心上）「堯舜之仁不徧愛人」題で] 至人 [と破いたの] は即ち
堯・舜なり。「古帝」・「二帝」の字様を用いる者に較べて、超脱（規則・形
式にとらわれない）すること多し。學者は、死法（固定化された規則・形
式）を拘守し、超脱に務めず、論語題に遇えば、破きて輒ち「聖人」の字を
用い、孟子題に遭えば、破きて輒ち「大賢」の字を用う。その他の「魯君」・
「衛卿」・「門人」・「時人」等の字は揺筆（筆を執る）し即ち來る。未だ曾て
文を作らざるに先ず此の字有りて、必ず之を紙上に書せば、此の心 方に安
んず。所以（ゆえ）に句 冗長の語多く、支節（煩瑣）多し。知らず此等
の字様 必ず萬に省く可からざる處に遇えば、^{まさ}方に之を許用す。^も如果し省
く可くして以て省くを高しと爲して、省かざれば、超脱する能わざるなり
（道光丁未 [一八四七年] 刊『時藝階』卷四・四十七葉・「堯舜之仁不徧愛
人」条）。

次に、承題について検討してみよう。

(3) 承題

商衍鑒は、承題について次のように概説する。

破題の後は承題と爲す。承とは接するなり。破 [題] 中の緊要（重要な）
の意義を將つて承接して下るを謂う。倘し正破なれば則ち反承を用い、反
破なれば則ち正承を用い、順破なれば則ち逆承を用い、逆破なれば則ち順承

を用う。餘は類推す可し。總じて明快にして關連するを要し、破〔題〕は破〔題〕よりし・承〔題〕は承〔題〕よりする可からざるなり（『清代科舉考試述録』第七章八股文、試帖詩概紀及舉例釈義 第一節 八股文之源流・生活讀書新知三聯書店・一九八三年 第二次出版・二二二頁）。

破題の後に続くのを承題という。そして、正破であれば反承を用い、反破であれば正承を用い、順破であれば逆承を用い、逆破であれば順承を用いるとする。

『文家模範』では、破題との接続関係を述べた後、虚字の使い方について説明を行ない、承題の最初に「夫」・「蓋」を用いるが、「甚矣」を用いるのはよくないとする。また、末尾に「耶」・「歟」・「乎」・「哉」などを用いるのは調子によるという。

〔破承〕承なる者は、承接なり。須く破題と緊〔密〕に相い關應すべし。破〔題〕中の未だ暢^{のば}さざるの意、承〔題〕中 之を暢言す。大約 正破なれば則ち反承、反破なれば則ち正承、順破なれば則ち逆承、逆破なれば則ち順承、分破なれば則ち合承、合破なれば則ち分承とし、題に随いて轉換し、破〔題〕と錯綜（逆転）す。故に承〔題〕の起句は、須く破〔題〕の結句を緊頂（ぴったりくつつける）し、承〔題〕の結句は、須く破〔題〕の起句に繳還（たちかえ）り、承〔題〕の中間の一句、題の正位を明點す。是の如くすれば、則ち承〔題〕と破〔題〕とは意勢 相い生じて複せざるなり。〔承題の〕起（あたま）に「夫」字を用いる者は、上意を承け指點（指し示す）するの辭。「蓋」字を用いる者は、上意を承け推原（たずねる）するの辭。或いは「甚矣」を用いる者有り、是れ之を甚^とだしくするの辭にして、深く一層^とを破くに非ず、當に之を用いるべからざるなり。結に「耶」・「歟」・「乎」・「哉」字を用いるは、其の調べ高くして辭 響^{しか}くを取る、云い（『文家模範』二十九葉）。

承題の最初によく「夫」・「蓋」・「甚矣」を用いるが、この『文家模範』以外に「甚矣」を用いるべきではない、と述べたものは見当たらない。すでに見たように、ふつうは、張泰開が『論文約旨』で行ったような解説を行なう。

破〔題〕と承〔題〕との反正順逆 須く互換すべし。破〔題〕承〔題〕の末句 字を換えて意を同じくする可からず。破〔題〕の意 未だ顯われざれば、〔承題において〕「蓋」字を用いて之を釋し、已に明らかなれば「夫」字を用いて順接す。已に盡くせば「甚矣」を用いて斷起す。皆な漫然とするに非ず（『論文約旨』四葉）。

実際に清代では、承題の最初に「夫」・「蓋」・「甚矣」を用いていたことは、『欽定科場條例』に引かれた、次の上諭からも理解できるであろう。

嘉慶四年（一七九九）^う奉けたる上諭に、郷〔試〕會試の頭場の文字〔について〕、承題・小講〔において〕「夫」・「蓋」・「甚矣」及び「今夫」・「且夫」・「嘗思」等の字を限り用いるは、亦た起きるに近年よりす……（嘉慶九年『欽定科場條例』卷四十三・三十三葉）。

さて、唐彪は『讀書作文譜』で、承題で犯してはいけない平頭・並脚についての梁素治の説明を引用する。

〔承題〕梁素治 曰く、承題 如し長題に遇いて、句を遂いて（一句ごとに）承け出す能わざれば、則ち宜しく關切重大なる者を選びて之を籠括（すべてを包括）すべし。 承題の最も忌む者は平頭・並脚なり。平頭とは、領頭（あたま）の數字と破題の領頭の數字と相い同じきものなり。破題の領頭に「聖人」を用い、承題の領頭に亦た「聖人」を用いるが如き、是れなり。並脚とは、煞尾（さいご）の數字と破題の煞尾の數字と相い同じきものなり。破題の煞尾に「而已」字を用い、承題の煞尾に亦た「而已」字を用いるが如き、是れなり。 承題の起頭に「夫」字を用いる者は、上の意を承けて指點（指し示す）するの辭なり。「蓋」字〔を用いる者〕は、上の意を承けて推原（たずねる）するの辭なり。「甚矣」字〔を用いる者〕は、破〔題の〕意を承けて懇切に之を言うなり。 破題は聖賢・帝王・諸人に于いては、須らく破くを用いて講^いい、承題は則ち之を直言すべし。如えは堯・舜なれば、堯・舜と直〔接に〕稱し、孔子は則ち孔子と直〔接に〕稱し、其の餘の諸人は、皆な題に因りて直〔接に〕稱

し、復た避忌無きなり、と（『讀書作文譜』卷之九・四葉～五葉）。

ちなみに、承題を作成する上での注意点を引用した後、唐彪は明の初期・中期の八股文の承題の末尾によく付け加えられた「原題」について言及する。

唐彪 曰く、承題の理は、其の小節（細かい）の處、梁素治 之を言いて已に詳し。必ずしも贅（くだくだしく）せず。茲に其の大なる者を取りて之を言へば、則ち「原題」の一款に如くは莫し。明初・中葉の文 多く承題の末に於いて上文を承領（応じる）す。此の體 最も美善と爲す。何ぞや。未だ口氣（語氣）の順わざる〔起講の〕前、上文を承領すれば、則ち上文は上に在りて、本題は下に在り。體裁 順なり。既に口氣に順い、始めて上文を領すれば、則ち本題は上に在り、上文は下に在り、義理 顛倒す。苟し布置 宜しきを得れば、猶お或いは義に背かず。布置 一たび其の宜しきを失えば、則ち體裁 乖舛すること甚だし。故に成（成化年間〔一四六五年～一四八七年〕）・弘（弘治年間〔一四八八年～一五〇五年〕）以前の文 多く承末の「原題」なる者に于いて此を爲すの故なり……と。或いは曰く、……〔この原題についての説明は〕安くんぞ之を今日に施す可けんや、と。余（唐彪）曰く、先輩の起講は簡短に過ぐれば、則ち宜しく學ぶべからず。承題の長くして條暢（筋が通る）なるも、何ぞ必ずしも學ばざらん。況や三・四句の下に即ち原題あるに於いてをや。亦た其の長きに過ぎるを嫌わざるなり、と（『讀書作文譜』卷之九・五葉～六葉）。

明代の八股文には、承題の最後に上文を承領する部分（「原題」）が付せられていたというのである。この「原題」は、清代の八股文に直接関係しないかもしれないが、やはり参照すべきものであると言うのである。

以上見てきた『文家模範』・『論文約旨』・『讀書作文譜』などをまとめて、『匯學讀本』では、次のように述べる。

承題とは、破題の未だ盡くさざるの意を承けて發明する者なり。……凡そ承題を^{つく}做るは、其の格 三・四句を以て正と爲す。五・六句に至れば、則ち長し。點逗（叙述） 最も明快斬截（はっきりする）なるを要す。首句は

是れ題の界限（範囲）なり。須く本題に従いて説き起こすべし。即し上文を撤^すて難き者有るも、亦た須く先ず本題を承けるべし。[そうすれば] 上文を倒入し、方めて題位（題目の要求）をして亂れざらしむ（光緒四年『匯學讀本』三十四葉）。

承題とは、破題で言い尽くせなかったことを承けて明らかにするものである。ふつうは三・四句にする。五・六句にすると長い、という。そして、続けて破題と承題との呼応関係について説明する。

且つ承題と破題とは斷じて相い應ずるを要す。如し順破なれば則ち逆承を用い、逆破なれば則ち順承を用い、分破なれば則ち合承を用い、合破なれば則ち分承を用い、正破なれば則ち反承を用い、反破なれば則ち正承を用う（光緒四年『匯學讀本』三十四葉）。

また、用いる虚字についても述べる。

首句起頭の虚字に至れば、宜しく「夫」字・「蓋」字を用うべし。「甚矣」字の如きは、用う可しと雖も却って常には用いず。末句の住脚（末尾）は多く「耶」・「歟」・「乎」・「哉」等の字を用うるは、其の調べ高く韻 響くを以てすればなり。其の餘の「矣」字・「也」字・「耳」①字は、亦た皆な之を用う。尚お「之」字・「云」②字・「如此」字を用いて住^やむ者有り。俱に文に臨む時に在りて斟酌するのみ（光緒四年『匯學讀本』三十四葉）。

①此れ勢いに順いて輕落の詞なり。易きに至り難きこと無し^の意有り。

又た然らずの意有り。其の意 遠くして韻 長し。文中を轉ずるに往々として之を用う（光緒四年『匯學讀本』三十一葉）。

②猶お説くがごときなり。句末に之を押す。大意は此の如く説話すると謂う（光緒四年『匯學讀本』三十一葉）。

最後に、破題の最初もしくは最後の文字と同じものになるのはいけないとし、破題では代字を用いたが、題目の呼称をそのまま承題で用いるとする。

承題は、最も平頭・平^マ〔並〕脚を忌む。平頭とは、領頭（あたま）の數字と破題の領頭の數字と相い同じものなり。並脚とは、煞尾（さいご）の數字

と破題の煞尾の數字と相い同じものなり。破題は聖賢・帝王・諸人に於いて、須く破くを用いて講うべし。承題は、則ち之を直言す。如えば堯・舜なれば、直〔接に〕堯・舜と講い、孔子は則ち直〔接に〕夫〔孔〕子と講い、餘外の諸人は、皆な題に依りて正しく稱し、復た避忌無し。又た夫子は單に子と稱し、顔子は單に回と稱し、曾子は單に參と稱す。諸々の此の類の如し。皆な其の簡捷（簡便さ）を取るなり（光緒四年『匯學讀本』三十四葉）。

また、『制義綱目』では、承題を開合・遡流・順敘・羅紋・斷制に分けて、次のように解説している。

開合①承〔割注〕先ず一句を渾沌起し、題意を罩め盡くす、或いは先ず一句を反して、題意を翻盡し、後に貼題（題目に合致させる）して一二句を説く、末は一句を以て收む。

遡流承〔割注〕先ず題の上面より説き起こし、後に題意を以て之を收む。文格（王鏊〔景泰元年（一四五〇）～嘉靖三年（一五二四）〕の「身不失天下顯名」（『中庸』第十八章・第二節）の承題②、是れなり。

順敘承〔割注〕題に順（したが）いて頭より説き下り、末 一句を以て總じて之を斷ず。

羅紋承③〔割注〕題に依らず敷衍し、之を縦横收拾す。長題は此の法を多用す。

斷制承〔割注〕題意を説き明らかにし、自ら己が意を以て之を斷づ。本題に就きて斷づる者有り、題外に就きて斷づる者有り、又た通章の主旨より斷づる者有り（『制義綱目』不分卷・三十六葉）。

①此の意を明らかにせんと欲して、先ず彼の意に即きて以て之を發するを開と曰う。既に彼の意を明らかにして忽ち前の意に接して以て之を印す合と曰う（『制義綱目』不分卷・二十六葉）。

②俞長城の『百二十名家制義』によれば、この王鏊の承題は、次のようなものである。

夫放伐非聖人之本心，出干不得已也，不得已而爲之，何至于顯名之

失哉（『百二十名家制義』卷之四・王守溪稿・中庸 成化乙未・「身不失天下顯名」条・六十一葉）。

③羅紋とは、題 層折（幾重にも転換する）有れば、文に随わず敷衍し、之を縦横收拾す……（『制義綱目』不分卷・十八葉）。

そして、開合が標準的なものであると言う。

承〔題〕は開合を以て正と爲す。……凡そ承〔題〕中の立局は、必ず開合體なり。餘は題を相て之を爲す可し。惟だ斷制承のみ變體に屬せば、宜しく輕がろしく用うべからざるなり（『制義綱目』不分卷・三十六葉）。

最後に、破題と承題との対応関係は、順破→逆承・分破→合承・渾破→明承ですべてを言い尽くしているとする。

合して之を論ずれば、順破は則ち逆承、分破は則ち合承、渾破は則ち明承の三語もて之を盡くす（『制義綱目』不分卷・三十六葉）。

では、具体的にどのように破題と呼応させて承題を書くかを長沙の曹原亮の『十四層啓蒙捷訣』（道光九年新鐫）にあげられた例文によって見てみよう。ただし、例文の関係から、正破→逆承・反破→正承・倒破→順承・順破→逆承・分破→合承・合破→分承の呼応だけしかを示せなかった。

①正破→逆承

題目：見不賢而内自省也（『論語』里仁）

不賢在人，見之當自省也。夫見而不省，安知己之不賢耶，子故爲見不賢者暢之（『十四層啓蒙捷訣』上・七葉）

（不賢の人に在れば、之を見て當に自ら省みるべきなり。夫れ見て省みざれば、安くんぞ己の不賢を知らんや。子 故に不賢を見る者の爲に之を暢す）

②反破→正承

題目：見不賢而内自省也（『論語』里仁）

見不自省，將不堪爲人見矣。甚矣不賢之宜鑒也，既見矣，而不内自省焉可

乎（『十四層啓蒙捷訣』上・七葉）

（見て自ら省みざれば、將に人の見るに堪えざらんとす。甚だしきかな不賢の宜しく鑒るべきなり。既に見て、内に自ら省みざるは可なるか）

③倒（逆）破→順承

題目：愛之能勿勞乎（『論語』憲問）

勞所當勞，愛之所必然也。蓋既愛矣，而顧欲勿勞乎，愛之者，當自思耳（『十四層啓蒙捷訣』上・九葉～十葉）

（當に勞うべき所を勞うは、愛の必ず然る所なり。蓋し既に愛し、顧だ勞うこと勿れと欲するか。之を愛する者は當に自ら思うべきのみ）

④順破→逆承

題目：忠焉能勿誨乎（『論語』憲問）

忠形於誨，勿誨不能也。夫誨未易言也，然既爲忠焉者矣，而欲勿誨也能乎（『十四層啓蒙捷訣』上・十葉）

（忠 誨うるに形（あら）われれば、誨うること勿きは能わざるなり。夫れ誨えて未だ言を易えざるなり。然らば既に忠を爲す者なり。而して誨うること勿らんと欲するや能くせんか）

⑤分破→總（合）承

題目：女得人焉爾乎（『論語』雍也）

爲政在人，得之所由詢也。甚矣得人之有益於爲政者深也，子於子游，而能已於詢哉（『十四層啓蒙捷訣』上・九葉）

（政を爲すは人に在り，之を得るは詢（はかる・とう）に由る所なり。甚だしきや，人を得るの政を爲すに益有る者は深し。子 子游に於いて，能く已に詢（はかる）に於いてをや）

⑥總（合）破→分承

題目：女得人焉爾乎（『論語』雍也）

以得人爲問，將以覘賢者也，蓋人者，宰之所資取也，問之以得，殆以是覘子游爾（『十四層啓蒙捷訣』上・九葉）

（人を得るを以て問を爲すは、將に以て賢者を覘（うかが）えばなり。
蓋し人なる者は、宰の資取する所なり。之に問うに得るを以てするは、
殆ど是を以て子游を覘うなり）

おわりに

『制義綱目』で破題と承題とについて次のように要領よくまとめている。

破〔題〕・承〔題〕は、全文の綱なり。帖括（八股文）語氣に順うを以て制と爲す。開首 先ず斷を加えて之が破〔題〕・承〔題〕と做すは、何ぞや。蓋し書理 淺深次第有り。命題に長短偏全有り。若し憑空（根拠無く）して説き起こせば、題〔目〕の界限（範圍）必ず模糊たり。若し自ら〔破題・承題ではなく〕總冒を爲せば、題〔目〕の語氣 必ず割裂す。惟れ學びし者の語を用いて〔題〕・承〔題〕を作り、以て其の首に冠し、題の歩位（位置）と主旨とをして一見して了然たらしむれば、則ち通篇の局意（各部分の意味）は遂に裘（毛皮）の領有る・網の綱有るが如し。而して語氣に順うの處、以て題の起止（はじめと終わり）の如くす可し。必ずしも「前を瞻（み）て後を顧み」（慎重に事を図る・『楚辭』離騷）し、自ら書き添えるを作さず。是を以て古人 題〔目〕を破くに寧ろ詳らかなるも略すること勿く、寧ろ拙なるも巧みなること勿れ。總じて題目をして完全に清楚ならしめんと欲すれば、漏らさず侵さず、倒れず亂れずして、全題の主意を包括し、通篇の格局（組み立て）を立定するなり（『制義綱目』不分卷・三十四葉）。また、続けて次のように述べる。

破〔題〕有りて而して又た承〔題〕有る者に至りては、破〔題〕の地爲るや〔二句なので〕多からず、常に含みて未だ盡くさざるの意有り、惟れ承〔題〕以て之を明らかにす。然る後に意 暢にして局 定まる。故に承〔題〕の制爲るや上以て破題の氣を引き、下以て小講の脈に接す。苟（かりそめ）にせざるなり。萬曆（一五七三年～一六二〇年）の後、此の意 明らかならず、〔題〕・承〔題〕 惟れ簡巧（簡潔で巧み）なるを務め、意を立つる者、

或いは之れ有る容し、立局する者全く無し。遂に何れの題を論ぜず、一概に小講の中に在りて總冒^なを作す。而して割裂添扭疊牀架屋（屋上屋を重ねる）の病、皆な此れに由りて起こる。今、特に古人 制を立つるの意を推して、一綱の字を以て之を括す、顧名思義（名称を見てすぐに意味がわかる）にして、古法 興り、文體 正しくす可きを庶幾う（『制義綱目』 不分卷・三十五葉）。

このように、破題と承題とは八股文の最初におかれ全体の要点を述べるところであったのである。